

# 第 13 回中医学会勉強会 漢方応用講座

講師：路京華 老師

レポート：岸奈治郎(館林厚生病院漢方内科)

開催日：2014年11月1日

今までは症例分析や処方内容の検討、治療の効果、その後の処方の変更など一つの症例を深く掘り下げて勉強を進めてきました。今回からは目の前の症例を弁証するトレーニングということで、症例を弁証し検討することを主眼に置いたスタイルで進めていきます。いつもどおり症例を提示し（プリントの配布はない）、その場で弁証します。平馬先生と私（岸）が白板に自分の弁証・治法を示し、それを元に分析して行きました。

## 【症例 1】

27 歳女性

主訴) 無月経 3ヶ月 / 頭痛を伴う肩から首のこわばり

現症)

正月に月経があった。それ以降月経がないが、以前から月経不順だったため様子を見ていた。しかし2月からは肩から首にかけてのこわばりを伴う頭痛も出現しはじめ、3月になっても月経が無い。最近では胃もたれやげっぷが出るようになったので心配で受診した。

既往歴)

月経不順：特に治療は受けてはいない。

初潮 14 歳。月経周期 12~50 日。月経期間は 3~7 日間程度だが、30 日くらいだらだらと出血することもある。経血量は少ない。月経痛あまりない。

現症)

胃もたれ、心下部が痞える感じがして痛いことがある。げっぷが多い。食欲は普通だが胃腸が弱く下痢をしやすい。排便、1~2 行/日で柔らかい。

頭痛は左後頭部に重たく張るような痛みがする。顔のほてり、手足の冷えがある。

常にイライラした感じ。眼精疲労。

睡眠は入眠は良いが夢を見ることが多く、寝ても疲れが取れない。

体重はここ 1 ヶ月で 4kg 減少し、2kg 戻った。

~~~~~ここまでの情報を整理して弁証、治法を組み立てました~~~~

〈平馬先生〉

〔病性〕 裏・熱に偏る・虚実挟雑  
〔病性〕 正虚邪存  
〔病位〕 肝為主、脾  
〔不足〕 血、陰  
〔邪〕 陽亢、氣滞  
〔弁証〕 肝血虚 肝陰不足 肝陽上亢  
肝脾不和(素体脾虚)  
〔治法〕 滋養肝陰血 平肝止痛 疏肝健脾  
〔処方〕 柴胡・白芍・当帰  
益母草・川芎  
釣藤鈎・天麻  
石決明・白朮・茯苓  
陳皮・炙甘草

〈岸〉

〔病性〕 裏熱虚実挟雑  
〔病性〕 正虚邪存  
〔病位〕 肝 胃  
〔病因〕 熱・血虚・氣逆  
〔弁証〕 肝陽上亢 肝血不足 胃氣上逆  
〔治法〕 疏肝清熱 滋養肝血 胃氣降逆  
〔処方〕

柴胡加竜骨牡蠣湯（柴胡・黄芩・半夏・人参・生姜・大棗・桂枝・茯苓・竜骨・牡蠣）

四物湯（熟地黄・当帰・川芎・白芍）

旋覆花湯（寿世保元）（旋覆花・陳皮・半夏・茯苓・芍薬・人参・桔梗・細辛・甘草・桂枝・生姜）

※ 路先生と岸の問答を記します。

路先生「肝血虚の根拠はないか？」

岸「月経不順と経血量が少ないことは、原因は色々考えられるが、肝血虚が原因と考えることも出来る。寝ても疲れが取れない、夢を見るというのは肝血虚で見られる症状と考えました。イライラするのも肝血虚が一つの原因かもしれません。」

路先生「病性の『裏』とはどこか？」

岸「表ではないところと漠然と捕らえています。主に臓器（この場合は肝）を念頭において考えました。」

路先生「臓器であるとして、それは上焦か、中焦か、下焦か。」

岸「肝を念頭に考えていたので下焦かと思いましたが……、症状は頭痛や肩こりなので上焦かな??」

路先生『『虚実挾雑』とあるが、虚と実は何を指しているのか。』

岸「虚は血虚、熱と気逆を実と取りました。」

路先生「脾はどうか。」

岸「胃もたれ、胃の痞え、げっぷが多いという症状と、食欲は普通という症状から胃の症状と取りました。しかし、体重減少、大便が日に2回くらいあって柔らかい、胃腸が弱く下痢をしやすいということから脾虚があるとも考えられます。脾虚であれば脾不統血で不正出血も説明することが出来ますし……脾虚なのでしょうか。」

路先生「ももとは体質的に脾虚でしょう。処方に柴胡加竜骨牡蠣湯や旋覆花代赭石湯があります。竜骨牡蠣、大黃や代赭石は重い薬なので気を下げますが、脾胃虚弱の人に使う時には特に注意しなければなりません。」

路先生「腎はどうですか。」

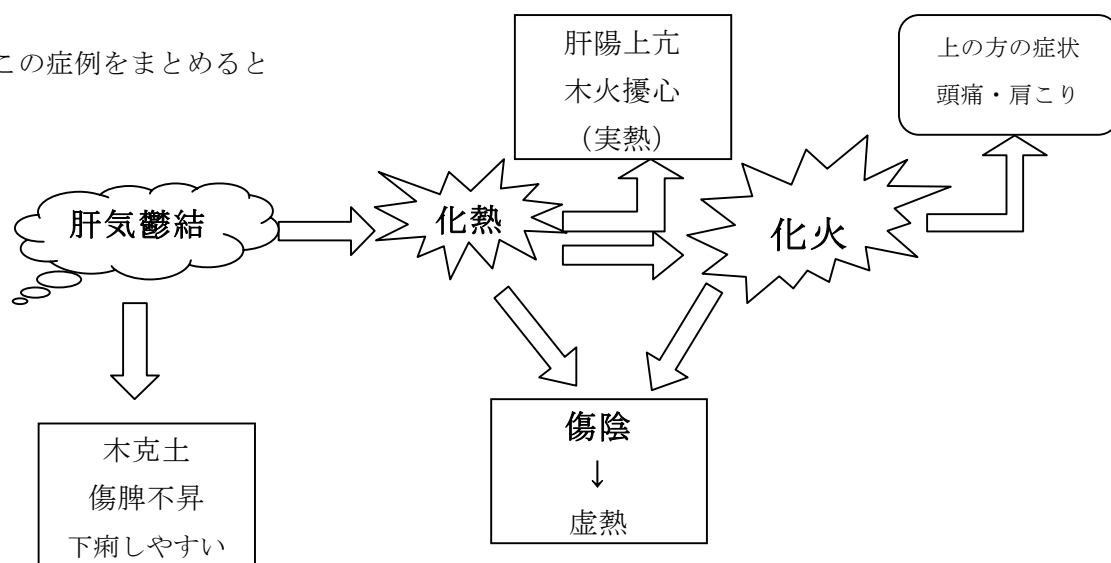
岸「確かに月経には肝・腎・任脈・衝脈が関連しています。この人は14歳で月経が来ていて二紀14歳と考えれば黄帝内経の通りと思います。小児期の成長不良や排尿・排便障害(腎は二穴を主る)もありません。冷え性や腰痛(腰は腎の腑)の記載もありません。顔が火照ると言うのを五心煩熱と考えれば腎陰虚と取れますが、手掌足底の夜間のほてりはなくむしろ手足の冷えがあります。腎は考えにくいと思います。」

路先生「初潮が14歳というのは確かに黄帝内経の言うとおりで、現在の子供たちの状況を考えると初潮が来るのが早まって10~12歳くらいで来る子供が多いようだ。そう考えると14歳での初潮は天癸が発来するのが遅かったと考えてよいのではないか。」

路先生「手足の冷えはどうか。」

岸「肝血虚による症状とも考えられますが、肝陽上亢により手足に十分に気が巡らない四逆の状態と考えられます。」

この症例をまとめると



代用できるエキス製剤は

抑肝散加陳皮半夏 4.5g

加味帰脾湯 3.0g

知柏地黄丸 3.0g

※ ここで加賀谷さんから質問「頭痛というと葛根湯を思い浮かべますがこの症例ではいかがですか？」

路先生「いかがですか？」

岸「この症例は熱があつて問題になっている症例ですから、治療の方針としては清熱、降下です。頭痛についても左側頭部で、首・肩の凝りに付いても葛根湯で特徴的な後頭部・後頸部などの足太陽膀胱経が走行しているところでは無いようです。むしろ首から肩に走行している手少陽三焦経が考えやすく、左後頭部についても足少陽胆経に一致しているのではないかと考えられます。

清熱・降下の治療をするのに葛根湯を使った場合には、桂枝、麻黄が温性、昇性なので目的を果たせません。また、肝気鬱結して発生した熱が、肝と表裏の関係にある胆に移り、足少陽胆経、手少陽三焦経に沿って上亢し頭痛になっていると考えられます。ですから、少陽の熱を冷ますような生薬を組み合わせるべきです。

また頭痛の分類として、後頭部の頭痛は太陽、側頭部の頭痛は少陽、前額部の頭痛は陽明、頭頂部の頭痛は厥陰と分類されます。太陽の頭痛には羌活、蔓荊子、川芎、陽明の頭痛には葛根、白芷、知母、少陽の頭痛には柴胡、黄芩、川芎、厥陰の頭痛には呉茱萸、藁本などの生薬を使うとより効果的です。

ですからこの症例で葛根湯は熱を助長してしまい頭痛の治療には向かないと思います。」

路先生「頭痛はどうなりますか」

岸「悪化する可能性が高いと思います。」

## 【症例 2】

40 歳女性

主訴) 肩こり 食欲不振・心窩部膨満

現症) 最近仕事が忙しく残業が多いせいか、肩こりがひどくて受診した。

既往歴)

乳癌手術治療。2 年前 10 月に手術治療を行い抗がん剤や放射線療法も施行した。1 年前から今年の 5 月までホルモン療法を施行した。

月経：先月の月経は 20 日で来て出血は 2 週間続いた。今月はまだ無い。

現症)

体がだるくて肩こりがひどく背中が張る。仕事が忙しく残業が多い。仕事中はいつも緊張している。

胃がむかむかして食欲が無い。胃が張っていて食欲があまり無い。便は日に1~2行。  
ホルモン療法を始めたときから手足の指が痛くなり始めた。朝起きた時にこわばりが強く、  
今でも朝になると指が少し痛い。時々頭痛がして首筋も痛い。  
夕方になると眠くなるが、夜になると眠れない。  
舌：舌質・淡紅色 舌苔・薄白苔

~~~~~ここまでの情報を整理して弁証、治法を組み立てました~~~~~

〈平馬先生〉

〔病性〕 裏虚実（寒熱ははっきりしない）  
〔病性〕 正虚邪実  
〔病位〕 胃・肝・心  
〔不足〕 気・血  
〔実〕 気滞  
〔弁証〕 気血損耗（術後化学療法、放射線治療の為）  
肝鬱気滞・肝胃不和・心神不寧  
〔治法〕 疏肝和胃・補益気血・養心安神・行気止痛

〈岸〉

〔病性〕 裏平虚実挟雑  
〔病性〕 正虚邪実  
〔病邪〕 気虚・気滞  
〔弁証〕 脾気虚損・肝気鬱結  
〔治法〕 補気健脾・疏肝解鬱  
〔処方〕 逍遙散  
六君子湯

※ 路先生と岸との対話を問答形式で記します。

路先生「弁証に脾気虚とありますが、脾虚と脾気虚はどう違いますか。」

岸「それはあまり意識していませんでしたが、脾虚と言うと「脾陽虚」「脾陰虚」「脾気虚」などがすべて含まれるイメージです。脾気虚だと特に消化機能が低下しているイメージでしょうか。」

路先生「肝気鬱結とあるが、上昇はしてませんか。」

岸「仕事が忙しくて緊張があつてストレスが肝鬱にさせていると思います。肩が凝つて、頭痛がして……あ、上の方の症状もありますね。肝鬱から上亢しています。」

路先生「そうですね。この人は仕事が忙しいということもストレスですが、乳癌になってしまったと言うのも継続的なストレスですね。病気になりたくてかかってしまうわけでは

ありませんから。ですから常にストレスがあり肝に負担がかかっています。しかしもともとの体質的に虚があるので、肝気鬱結して熱を持っても熱になりにくいので、症状として熱の所見は見られません。ただ肝気鬱結したものが上昇して上の症状がありますから降ろすような方剤を選ばないと駄目ですね。」

### 【感想】

弁証するに当たって、一つ一つのキーワードを細かく読み砕くことが大切だと痛感いたします。細かく噛み砕いたことによって、最大公約数を導き出し弁証につなげる作業が、今まで大雑把だったと痛感させられます。路先生からの一つ一つの質問に気づかされます。その上で、方剤の構成についても一つ一つの生薬を良く吟味して、お互いの性質や組み合わせなども逐一考え抜くことで、最高の治療に繋がるのだと思います。

路志正老師は北京で「三芝堂」という難病専門の診療所で診療をしていらっしゃいます（路京華先生も診察をされています）。去年の5月に見学にお邪魔いたしました。これらの緻密な弁証と方剤の組み合わせを駆使することで「難病」を改善することが出来るのではと思いながら、毎回勉強会で四苦八苦しております。

今後とも宜しく願いいたします。

(レポート：岸 奈治郎)